

ささやかな抵抗



令和七年八月

加藤文俊

白と黒のあいだ

できれば自由にやりたい。そういいながら、ぼくたちはルールをつくりたいとする。「ここまででは、だいいじょうぶだ」という「線」を引く。ルールをつくりたい「線引き」をしてあげば、たとえば誰の責任なのかはつきりする。何かあったときのことを考えて、いくつものルールをつくりたいのか。

ぼくたちの日常生活には、さまざまな「線引き」がある。ときには、引かれた「線」を目安にしながら、じぶんの到達点を決めてしまうこともある。ひとまず、その「線」に近いところであれば、基準を満たす（文句は言わないはずだ）。だから、それ以上のことはやらないし、その先に何かがあるのかを確かめようとしてもなくなる。目標のようであり、じつは妥協点としての意味合いばかりを気にかけているのかもしれない。

いつぼうで、ぼくたちは、「線引き」が難しく、「白か黒か」を判断できない事柄がたくさんあることも、経験的に知っている。白と黒とのあいだには、つねに

「グレー」が横たわっているのだ。「グレー」な部分の広がり、当然のことながら状況によって変わるし、人によってちがう感覚で向き合っていることもある。じつは、自由というのは、「グレー」をどうとらえるかということなのかもしれない。「グレー」は曖昧な領域だから、できるだけそぎ落としたいほうがいいのだろうか。それとも、「グレー」があるからこそ、ぼくたちの暮らしがいきいきとしたものになるのだろうか。

「線引き」を見に行く

まちを歩いていると、さまざまな「線引き」を目にするはずだ。道のどちら側を通ればいいのか、どこまではみ出していいのか。文字どおり、いろいろな「線」が路上に引かれていて、ぼくたちの動きに自由や制限をもたらしている。看板や貼り紙も、執拗にメッセージを発する。「線引き」は、罰金などを伴うくらいの厳しいものもあれば、ぼくたちの裁量に任されているような緩やかなものもある。その意味で、「線引き」によって生まれる「グレー」な領域は、ぼくたちの（そして社会の）寛容さの表れとして理解することもでき

るだろう。

「グレー」な部分は、「線引き」をふまえながら、くり返し書き換えられてゆく。そして、「グレー」な状況にに応じて、ぼくたちは、甘えたり甘えられたり、あるいは許したり許されたりする。ぼくたちのコミュニケーションは、「グレー」な領域の大きさや柔軟性を確かめようとする、不断のプロセスだといえるかもしれない。「どこまでだいたいようぶだろうか」という問いを現場にぶつけて、反応をうかがっているのだ。

コミュニケーションは続く

二〇二五年度春学期は「ささやかな抵抗」というテーマで、フィールドワーク（グループワーク）をおこなった。たとえば、人びとの流れ、列の並び方、公共スペースでのふるまいなどに目を向けてみる。フィールドに足をはこんでいると、さまざまな決まり事が表示され、いくつもの「線」や「矢印」の類いが、ぼくたちのふるまいに影響をあたえていることに気づく。もちろん、経験的に知られていることや事前の調査などにもとづいて、一連の「線引き」がおこなわれていることはまちがいないだろう。

だが、メッセージの「送り手」の意図が伝わらないことも多々ある。ぼくたちは、一人ひとりの生活感覚で、気まぐれに、ときにはわがままに「線」を無視したり踏み越えたりする。ことばを交わさなくても、あるいは文字となつてどこかに掲出されていなくても、ぼくたちは、それぞれの場所に埋め込まれた「ルール」を読み取りながら、「線引き」を解釈している。

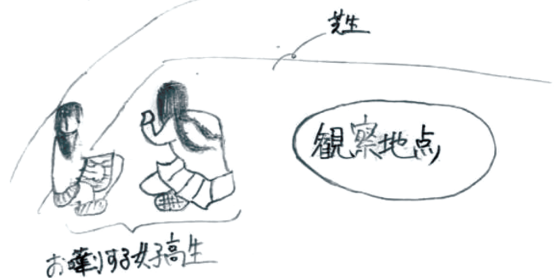
注目すべきは、ぼくたちの無言の調整作業によつて、大きな混乱もなく、「それなり」に場所の秩序が保たれているということだ。その背景には、おそらくいくつもの交渉やコミュニケーションがあつたはずだ。それぞれの方針を優先させつつ、ときには譲りながら（ときには諦めながら）、順番を決めたり、空間の占有を主張したりする。まちや人びとの暮らしを、「ささやかな抵抗」の所産として眺めることで、さまざまな価値観が（とりあえずは）協調的に併存しているようすを理解することができるだろう。

ぼくたちは、よりよい状況（秩序状態）を指摘して「ささやかな抵抗」を企て、環境にはたらきかける。それは、コミュニケーションを絶やすことなく続けていこうという意思表示なのである。

| 路を回遊する |

松田 旺大・吉田 優斗

[T-site diary]



はじめに

藤沢駅は平日・休日でも昼夜問わず、たくさんの人々で溢れていた。私たちが藤沢駅をフィールドに選んだ理由は人が多く、一見不規則に見える人の流れに法則を見出したり、その法則に逆らう人を見つけやすいと考えたからだ。駅には小田急線・JR・江ノ電の三種類の改札があり、それぞれ離れた場所に位置している。そのため、改札から藤沢のどこかに向かう人、藤沢駅からどこかの改札を通って電車に乗る人の大きな流れを観察するのに適していた。改札を出ると複雑に入り組んだ歩道橋と複数の出入り口があり、人々はそれぞれの目的地に向かって進んでいく。しかし、その出入り口の途中で、広場やピラ配り、路上のアーティストであったりと進行を妨げる役割を持つ空間や人が存在していた。私たちは複雑に入り組んだ駅を「水路」のように見立て、そこに溢れる人流を「水流」に、流れに乗る一人一人を「魚」と見立て、その流れを堰き止める役割を持つ空間や人を「堰」と見立てた。

日曜マーケット

日曜日には多くの屋台が藤沢駅の北口エリアに出店し

ていることがあった。コンセプトは週によって異なり、私たちが訪れた時は台湾フェスや映画フェスなどが行われていた。台湾フェスの時は台湾の飲食物やグッズが販売されており、映画フェスの時には大きなスクリーンが広場に建てられていた。日曜日は元々人が多い藤沢駅周辺だが、日曜マーケットが行われている日はいつも以上に人で溢れかえる。人々は広場や近くのベンチに集まり会話や飲食を楽しんでいた。このようにして、日によつては人流に影響を及ぼす大きな「堰」が出現することもある。用がない人でも足を止めることがあるため、この影響力は大きい。

流れに逆らう人々

主に改札に向かう流れと藤沢市内各地に向かう流れが存在しており、出勤・通学などの理由で明るい時間には前者、日が落ちると後者の流れが強くなる傾向がある。しかし、その流れに逆らつて行動する人も観察することができた。例えば、人を探しているのか、道に迷っているのか、小田急改札周辺をぐるぐると回っている人や人の間を縫って自転車漕ぐ人などがいた。実際の魚でも観察できるように、逆流して行動する人々が稀に存在し

ていた。

ピラ配り

藤沢駅には立ち止まって仕事をしている方々も多く見受けられた。北口のピラ配りの方々やパネルを持つている方々は歩道橋の端に点在しており、人流を妨げないようにはしていた。南口のピラ配りの方々は等間隔に位置しており、右側を通っても左側を通っても配布物を効率よく配れるように仕事を行っていた。このような方々も人流に逆らっていると言えるだけでなく、歩く速度を遅らせたりと大きな人流に影響を与えていると言える。また、人流は時間によって多少変化するため、ピラ配りの方々は多少立ち位置を変えていることがわかった。例えば電車が到着して多くの人々が駅から出てくると、その人流の妨げにならないように後ろに移動する。電車が来なかったり、日が暮れたりして人がいなくなった時には、より人目に付きやすい場所に移動したり、パネルの向きを変えたりしている。このように、川に存在する堰や魚と異なる点として、ある程度は一定の場所に存在するが、常に小さく移動しているという点が挙げられる。水路のようには見立てられても、人が関わってくると抵抗の仕方は

少し異なってくる。

駅の流れ

藤沢駅では不規則ながらも大まかな人流が形成されている。緩やかに曜日や時間と結びつきながら、川の流れや潮の満ち引きのように強さや向きを変えて人々が動いていく。平日では通勤・通学で駅を利用する人が多いのか、各鉄道会社の時刻表に合わせて流れの大小が変化していく。例えば朝だと、上りの電車に合わせてどこからともなく人々が駅に集まり改札口に吸い込まれていく。反対に、下りの電車が到着すると改札口から一斉に人々が放たれ一時的に流れを成し、出口が増えるにつれて分散・解消していく。一方、夜の大まかな流れは朝と反対になるが、社会人はそのまま家へ向かう流れを形成するのに対して学校帰りの学生は広場やベンチなどで滞留し、漂っていることが多い。休日だと時刻表と関連した流れは小さくなる一方で、遊びに出掛ける人々が増えるため、平日同様に多くの人が集う。南口では元、小田急の改札と江ノ電の改札を結ぶ橋の流れが一段と強くなり、まるで急流のように人々が往来する。北口ではマーケットが開催されたり、広場があったりするため普段よ

りも流れが緩やかで、人を掻き分けて進むような感覚になる。このように、藤沢駅では曜日や時間、場所やどのような人々が利用するかによって流れの性質を変化させ、それに順応しながら利用者はそれぞれの目的地へと向かっている。

堰について

大まかに流れていく藤沢市の人流では、足を止めたり、休憩したりする人々も見受けられる。前述したように日曜マーケットでは、それを目的に來た人のみならず、偶然通りかかった人々も匂いや音楽、装飾に魅かれて思わず足を止めてしまう。屋台で買ったものを近くのベンチや広場で広げて食べ、忙しなく流れる人々を横目にゆったりとしたひとときを過ごす。アーティストがパフォーマンスをしている時には、近くのベンチで座りながら、ゆったりと演奏を聴いている人々がいる。このように、歩道橋にもともとあるベンチや広場が、マーケットやアーティストの演奏と結びついて、大きな一つの堰になることがある。さらに、藤沢駅北口にある広場は芝生となっており、屋根はないが寝ころんで快適に過ごすことのできる空間となっている。休日の昼間であれば家族連れが、平日の

夜であれば多くの学生が広場に集まり、話に花を咲かせる。時折、流れる人々の中に友達を見つけ、声を掛けて広場に誘う様子も見受けられた。このように広場は人々の流れとは異なる時間軸に存在し、様々な世代に利用される憩いの場として機能している。天候には左右されてしまうが、固定された一定程度の大きさを持つ堰とみなすことが出来るだろう。

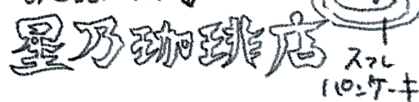
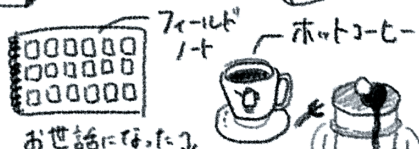
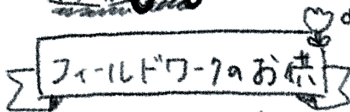
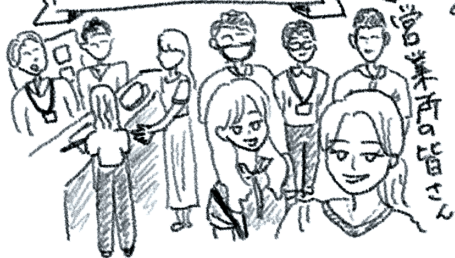
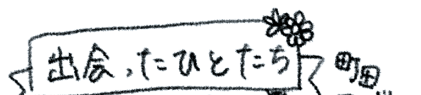
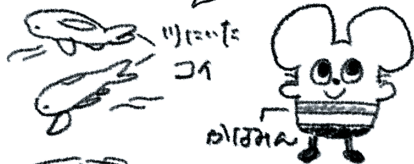
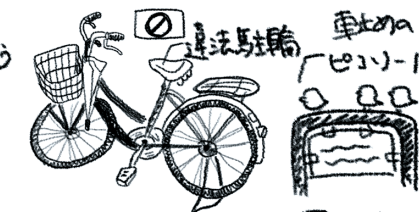
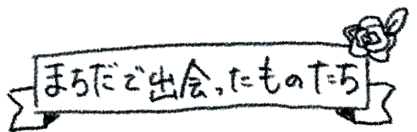
終わりに

人々の流れはどこか固定化されているようで、日常の些細な変化によって少しずつ調整が行われている。大部分の人々はその流れに無意識的に身を任せ、上手に流されていくが、それに逆らう人々や妨げる力が働くこともある。その流れの均衡が上手く保てなくなると衝突が起きたり、乱れたりする。そうならないよう私たちは譲り合ったり避けたりしながら目的地を目指し、幾つも積み重ねることで新たな流れを形成しているのだろう。互いに無言の領域を超えないように気を配りつつ、それぞれの目的のせめぎ合いによって、時と場合に応じた流れがつくられ、私たちの目の前に表れているのではないだろうか。

歩いて、見て、まちと出会う

月ヶ瀬 優・堀合 詩織・馬飼野 朱李

[あしゆ]



町田フィールドワークのいろは

あしゆの町田フィールドワークは雨の日にスタートを切った。初回は四年生二人に同行していただき、フィールドワークのいろはを学んだ。お二人から教わったのは「ただ歩く」ことである。極限までシンプルだが最初はそれしかない。町田駅周辺を回り、少しの違和感も見逃さずに気になったところは写真に撮り記録した。対象を絞ろうとする焦る心を排除しながら材料を集めていくと、町田のささやかな抵抗に対する印象が作られていった。町田全体から感じたのはカオスである。カオスの中に町田の抵抗が紛れていて、その裏には違反がある。違反の存在を想像すると一抹の緊張を感じることもあった。逆に抵抗の中にあるちよつとしたユーモアを見つけると心が緩んだ。純粹にフィールドワークを面白がった初回の発表タイトルは「雨のまちだつて面白い」。次回からも対象を絞ることはまだ考えず、引き続き歩くことにした。

バス停

二回目の発表タイトルは「人々の心の余裕」である。最初はやはりキャッチや路上ライブなど治安の悪い

方に目がいった。前に感じた通り抵抗と緊張は共存しているのか。もう帰ろうとして、最後にもう一押しと見に行つたバス停に興味が湧いた。場所的にも時間的にも余裕があるからか、電車よりもしつかりしている列で、町田のカオスに少し疲れを感じていた私たちにとつて安らぎを与えてくれた。ささやかな抵抗に常にまとわりついてきていた緊張が、ほとんど感じない空間に惹きつけられた。最初上の通路から地上のバス停を眺めていたことも、観察対象のバス停と自分たちが切り離されている感じがして面白かつた。私たちは観察対象をバス停に決めた。

町田バスセンター

「とりあえず歩く」その精神は忘れない。とりあえず全てのバス停を回ることにした。すると、バス停によつてバス停に書かれている指示情報や、それに伴う列の性質が全然違うことがわかつた。次に「バス停性格診断」と称してバス停を分類し、分析した。町田バスセンターに集まるバス停は利用者が独自にルールを作つて秩序が保たれている「現場柔軟型」に分類された。私たちはそこに他とは違う特別感とささやかな抵

抗の香りを感じた。その正体は何なのかより詳しく探るため、バスセンターをフィールドにささやかな抵抗を追うことにした。

バスセンターのそれぞれのバス停を具体的に見ていった。まずは「山崎団地行き」。町田随一の乗客数を誇るこのバス停では、誘導線が消えかけ、列は大胆に斜め。壁のアーチを突き抜けるその姿に、一種の風格すら漂う。並んでいたお婆さん曰く、この形はもう何年も前から変わっていないという。自由だけどトラブルのない、経験と暗黙の了解で成り立つ秩序があった。すぐ隣の「山崎団地センター行き」は、列を見つけてるのが難しい。というのも、待合室の裏に抜け道のような導線があり、そこに人が並んでいるからだ。見えにくいのが、実は誘導線通りの正統派。同じ山崎団地を目指すバスでありながら、ここまで佇まいが異なるのが面白い。「桜台・下山崎行き」は、一見すると親切そうに見えて、初めての人には少し難しい。桜台と下山崎、二つの行き先に向けて左右に列が分かれており、バスが交互に到着するたび、二本の列はゆっくり伸びたり縮んだりを繰り返す。混雑時には列が階段の

上まで続くため、二階から降りてくる人には、どちらの列なのか判別しづらいというトラップも。そして「野津田車庫行き」。普段は目立たず、初心者にも優しい。しかし午後九時を過ぎたあたりから状況は一変する。他の路線が混みはじめると、それらを縫うように裏道的な列が形成され、突如として複雑な動線の一部となるのだ。

あまりに個性的なバス列の数々に、私たちは不思議でたまらなくなつた。誘導線や張り紙は誰が整えているのか。なぜ、こうもバス停に性格が出るのか。そんな疑問を抱きながら、私たちは「野津田車庫行き」のバスに乗り込んだ。終点、神奈中町田営業所で聞いた話から見えてきたのは、現場の声に耳を傾けながらも、変化やズレを排除せず、「ささやかな抵抗」をやわらかく肯定する現場の人たちの姿だった。今回のフィールドワークで私たちは、単なる列の観察以上のものを体験した。それは、人の動きに合わせて少しずつ変形していく空間のあり方であり、時間とともに育まれる現場の知恵だった。無機質なはずのバス停に、ここまで豊かな風景があったことに、驚きと学びを感じた。

町田をおさめる

町田のフィールドワークが終わった。何を最終成果物に落とし込もう。

私たちあしゆは全員が今学期から加藤研に所属したので、フィールドワークも最終成果物作りも初めてだ。前例を見せてもらったりしながら、まずは私たちがなりに最終成果物を制作する意味などを考えてみた。最初に、私たちの作ったものを「まちに還す」ということはどういうことなのかを考えた。あしゆの行ったフィールドワークは、町田の人との対人コミュニケーションはほぼ無く、私たちが半ば一方的に町田のことを調査したという感じだ。そのためポスターのような、見てくれる人待たず姿勢のものではなく、私たちが人びとを積極的に巻き込んで町田のこと、町田のバス事情について知ってもらうことが求められる。この時点でなんとなくポスターや雑誌は最終成果物の候補から消えていった。

あしゆがいつも通う町田の星乃珈琲店で同じことを考えていたある日、ゆうが「町田のバス停ってゲーム性があるよね」と言った。ルールという壁を壊し独自

の並び方を編み出したバス列たちが、互いにぶつからないように、でも遠慮なく並んでいく様子は確かに側から見るとゲームのようだ。バス列がマス目で、人びとがコマ…。すぐろくみたいじゃない？と、この混沌としたバス停事情にぴったりの案が浮かんだ。使うバス停は四つ。町田のバス停の中でも特に面白い並び方をするとところを厳選した。また、それぞれのバス停には違った注意表記も書かれている。その要素を取り入れたり、町田ならではのネタを所々ではさむことによりこのすぐろくのオリジナリティーが増していった。この町田らしさに採まれながらも行きたいバス停に着くことができたならゴールだ。すぐろくの名前は「のるまでマチダ。」あしゆが半年間かけて得た町田パワーが詰まった作品が出来上がった。

Live

伊東 柚香・中島 羽那・西尾 有紗

[湘南台 Tryangle]



発見！湘南台アートスクエア

湘南台アートスクエア。名前は聞き馴染みがないかもしれないが、湘南台駅を利用したことがある人なら大方分かるだろう。ブルーラインの改札の向かいにある、木目調の床のちよつとした広場のことだ。

最初はスクエア内の赤い壁画にもたれかかる、イケケダンサー集団が気になったのがきっかけである。そしてそれに対しての行政の抵抗なのであろう、「壁画の鑑賞はここからしましょう 湘南台市民センター」と記載された奇妙な張り紙。独特の雰囲気をつホームレスの存在。私たちが最も使用しているはずの湘南台駅。しかし駅構内のこの場所には馴染みのないものに溢れていた。研究会の後に毎週アートスクエアを観察し、記録してみても、様々な登場人物がいることに気が付いた。みんなそれぞれテリトリーを持っていて、自由に過ごしている。

スクエア内で過ごす方々の人間観察にどんどのめり込んでいき、湘南台近くに住む加藤研メンバーにも協力してもらいながら記述を進めていくうちに、自分たちもテリトリーを持ち、アートスクエアに馴染みたいと思うようになった。スクエア内でご飯を食べて、

ファゴットを演奏して、他のテリトリーを侵食したり、この場所に順応したり様々な実践を試みていった。アートスクエアの自由度の高さに驚き、それと同時にどの程度自由にこの場所を利用して良いのだろうか、というルールの所在が気になり出した。

自然発生的な秩序

アートスクエアは、公式には「飲酒・火気・球技・スケートボードの使用禁止」「営利目的の使用禁止」といった最低限のルールがあるだけで、比較的自由な空間である。

アートスクエアには柱が複数あつて、皆それに沿って自分たちのテリトリーを形成しその中で活動している。言葉にせずともお互いに見えない境界線を越えないよう、距離感を保ちながら共存しているように見えた。

この秩序に対して私たちが「抵抗」してみるとどうだろうか。そこで、私たちは明文化された禁止事項を守ることを前提に、周囲への溶け込みから徐々に逸脱した行為を試すことにした。最初はアートスクエアの中に入り、柱のそばに座ってただ観察することから始

めた。そして次第に人数を増やして自分たちのテリトリーを広げたり、あるいはみんなでご飯を食べてみたりもした。湘南台の西口にある王将でそれぞれ餃子をテイクアウトし、アートスクエアの中で地べたに座ってピクニックのように食事会を行った。

またある日は楽器を吹き鳴らしてみたりもした。音楽は相鉄線のホームまで届くほどの音量だった。だが、私たちの活動に対して何か苦言を呈する人はいなかった。ただ少し通行人からの目が気になったものの、周囲の利用者からは私たちに干渉せず今まで通り各々活動を行っていた。

観察の回数を重ねるごとに、アートスクエアの利用者に見覚えのある人が増えていった。彼らの多くはいつも決まった場所に居て、たとえば中央の柱付近では、タコのように踊る男性やブレイクダンサーたちがグータッチを交わしながら、年齢や属性の異なる人々が緩やかなコミュニティを築いていた。

さらに注目したのは、「グレーゾーン」である。アートスクエアの一部には灰色の床があり、急いでいる通行人がしばしばそこを横切ることによってショートカットしていた。その一方でグレーゾーンに居座り、ただおしゃ

べりをしたり、何やらスマホで配信したりしている人もいた。ここは通行人のための場所でもあり、アートスクエアの中で活動する人のための場所でもある、文字通り「グレーゾーン」な場所だ。アートスクエアの中と外の曖昧な境界である。

制度やルールが緩やかであるからこそ、人々は自発的に他者と距離をとりつつ、同時に思わぬつながりや緊張感を共有していた。私たちの活動は、そうした秩序に対するささやかな「抵抗」となり、同時にこの空間が持つ不思議な共存のバランスを体感した。

「いつだって」「できること」のすき間で

スクエアでの観察を重ねる中で、なぜこの空間がこれほど自由なのかという疑問が生まれた。そこで私たちは、アートスクエアの立ち上げに関わってきた行政職員や地域団体の方々に取材を行った。

話を聞くと、行政と地域は治安や安全といった目的を共有している一方で、そのアプローチには違いがあることが見えてきた。行政は制度や予算の制約のもと、最低限の整備や提案に留まる傾向がある。たとえば、空間のデザインに関しても、装飾や雰囲気づくりと

いった部分にはあまり踏み込めない。一方、地域側は「せっかくならもっと素敵にしたい」「人が集まりたくなる場所にしたい」といった想いが強く、そのギャップに対して不満やもどかしさを感じている様子もあった。

ただし、対立しているわけではない。互いに完全に納得し合っているわけではないが、ぶつかり合いながらも妥協点を見つけ、空間づくりを継続しているという印象だった。こうした関係性そのものが、アートスクエアという空間の曖昧さや柔軟さにもつながっているのかもしれない。

静かな均衡がある場所

アートスクエアは、どこか立ち寄りたくなる場所である。時間に余裕があるとき、なんとなく行ってみたくなる。駅という公共性の高い空間でありながら、どこか私的な気配も感じられるその場所に、私たちは自然と惹かれた。

ホームレスの存在は、観察を続ける中で常に気になる要素だった。行政によって排除されたわけではなく、今もスクエアには複数のホームレスが出入りしてい

る。しかし彼らのあいだにも小さな秩序があり、自分たちでルールを決め、場所を綺麗に保とうとする姿勢が見られた。一方で、ダンスをする若者や、お喋りに集まる高校生たちの賑やかな存在によって、ホームレスが少し肩身狭く存在しているのも事実である。利用者たちは意図せずして、場所の「治安」を形づくっていた。

私たちは、他の公共空間であれば気が引けてやらなかったような実践をこの場所で試みた。観察だけでなく、演奏し、集まり、居座る。誰にも止められない自由さのなかに、周囲との距離感や他者の視線に対する緊張感が常にあった。アートスクエアは自由だが、何をしてもいいわけではない。その曖昧なラインのなかで、多様な人々がそれぞれの過ごし方を模索し、空間の均衡が保たれている。

行政と地域、利用者同士のあいだにある小さなずれや摩擦。それらを完全に解決するのではなく、受け入れ、調整しながらこの空間は維持されてきた。アートスクエアは完璧ではないけれど、だからこそ人が関わり続ける余白のある場所なのだと感じた。

ささやかな抵抗 | Modest Resistance
https://vanotica.net/modest_resistance/

2025年10月10日発行

編集・発行 慶應義塾大学 環境情報学部 加藤文俊研究室 <https://fklab.today/>
〒252-0882 神奈川県藤沢市遠藤 5322 デザイン棟B (ドコモハウス)

